市政トピックス

市政功労者等を表彰
―市制施行131周年記念式

10月27日に仙台国際センターで市制施行131周年記念式を行い、特別市政功労者2人、市政功労者32人、議員待遇者6人、永年勤続委員37人を表彰しました。表彰された方は次の通りです（順不同、敬称略）。

◆特別市政功労者（本市の振興発展に著しく寄与された方） 土佐誠、永井幸夫

◆市政功労者（本市の振興発展に寄与された方）〔自治・消防功労〕 野澤徳行、後藤潮、中澤幸一郎、藤田宏、川村祐毅、土田建、本郷克美、小山利之、軍司啓、伊藤勝衛、佐藤重子、三浦勝子、内田得栄、上野吉榮、遊佐優一、若生正吉、髙成田哲二、相澤かず子、丹野新一、針生正一〔健康・福祉功労〕鈴木邦夫、三浦忍、長田純一〔産業・経済功労〕佐藤喜久子、渡辺征夫、遠藤学、畑中孝治、守屋博喜、田中善一〔教育・文化功労〕梶賀千鶴子、千葉健、守屋長光

◆議員待遇者（市議会議員として12年以上にわたり市政の発展に寄与された方） 柿沼敏万、髙橋次男、木村勝好、相沢和紀、田村稔、花木則彰

◆永年勤続委員（委員として10年以上にわたり市政の推進に寄与された方）〔仙台市協働まちづくり推進委員会委員〕 風見正三〔仙台市男女共同参画推進審議会委員〕佐藤慎也〔仙台市社会福祉審議会委員〕大槻昌夫、村田祐二〔民生委員児童委員〕谷口加寿子、菅野恵美子、佐藤和子、佐藤正一、佐々木ゆみ子、森惠美子、羽田弘子、岩渕洋美、早坂八千枝、佐藤久美子、濱岡みち子、三浦睦夫〔仙台市精神医療審査会委員〕永嶋弘道、安田重〔仙台市障害支援区分判定等審査会委員〕相原容子〔仙台市介護保険審議会委員〕土井勝幸〔仙台市地域保健・保健所運営協議会委員〕橋本実〔仙台市感染症診査協議会委員〕舟田仁〔仙台市環境審議会委員〕金久保佐知子、齊藤千映美、柳沼眞理〔仙台市廃棄物処理施設設置等調整委員会委員〕成田由加里〔仙台市スポーツ推進委員〕近江英子、佐々木名緒子、棟方弘美、太田廣志、佐藤竹三〔仙台市中高層建築物紛争調停委員会委員〕西條由紀子〔仙台市広瀬川清流保全審議会委員〕宮城豊彦、近藤初音〔仙台市公民館運営審議会委員〕小岩孝子〔仙台市科学館協議会委員〕大草芳江、長瀬敏郎

市政トピックス

地元企業の魅力に触れる―高校生の職業体験

高校生が地元企業等の仕事を体験するイベント「進路のミカタLIVE！　未来ビュー仙台」が10月30日に夢メッセみやぎで開催されました。このイベントは、体験を通して、高校生に地元企業等の魅力や、学校での勉強と仕事の関連性を伝え、将来的な地元での就職やUターンにつなげるものです。

当日は、県内の高校生1642人が参加。会場にはIT企業や建設業協会、警察、新聞社など11団体が、さまざまな体験ブースを出展しました。生徒たちは、興味関心のあるブースを巡り、ドローンを飛ばして建設現場の測量を体験したり、警察官の制服の試着や鑑識の業務を体験したりするなど、笑顔で楽しみながらも、熱心に仕事の内容について聞いていました。生徒からは「仕事の具体的なイメージができて良かった。実際に体験してとても楽しく、興味が湧いた」「これから大学で学びたいと考えていることが、将来の仕事にも役立つことを知って良かった」などの感想が寄せられ、これからの進路について真剣に考え、将来に夢を膨らませていました。

市では、地元企業等との連携をさらに強化し、仙台で働く魅力を伝えるイベントなど、さまざまな取り組みを通して若者の地元への定着を促進していきます。

▲保育士業務の体験ブースでは、授乳やおむつ交換などの体験が行われました

市政トピックス

一力遼碁聖に「賛辞の楯」を贈呈

国内で実施される囲碁の七大タイトル戦の1つである第45期碁聖（ごせい）戦において勝利し、東北では23年ぶり3人目、市出身の棋士としては初めてタイトルを獲得された一力遼碁聖の功績をたたえ、11月6日に「賛辞の楯」を贈呈しました。賛辞の楯は、芸術、文化、スポーツなどの分野で優れた功績を残した市にゆかりのある個人や団体に贈るものです。

郡市長は「粘り強く挑戦を続け、ついにタイトルを獲得された姿に、多くの市民が勇気をもらい、励まされました。今後の活躍を心から楽しみにしています」とたたえ、一力碁聖は「結果を出せたのは応援してくださった皆さんのおかげです。さらに多くのタイトル獲得を目指し、頑張っていきます」と力強く語りました。

▲笑顔で賛辞の楯を手にする一力碁聖（左）

市政トピックス

優れた技能と長年の功績をたたえて

市では、長年にわたり優れた技能で市民生活を支え、まちづくりの基礎を築いてきた技能職の方々を表彰しています。11月9日の表彰式では、26職種41人の方々を表彰しました。表彰された方は次のとおりです（順不同・敬称略）。

〔石工〕長南薫〔印刷製版製本職〕針生ひろ子、伊藤真一、永橋晃〔印章彫刻師〕芳賀一浩〔菓子製造職〕畠山康秀〔ガラス職〕佐藤信也〔クリーニング師〕岩山剛〔写真師〕石川江亮〔鍼灸マッサージ師〕山口信子〔造園職〕阿部浩章、瀧口直美〔大工職〕小畑力佐藤純一、小川龍男〔タイル張職〕山﨑英雄〔畳職〕佐藤賢吉〔建具職〕菅原幸記〔調理師〕渡邉浩幸木村浩一〔電気工事職〕只野勝雄八島信夫、五十嵐功、菊池英一〔豆腐製造職〕菅野勝也〔とび職〕保科幸悦、江口薫〔配管職〕大宮安明〔板金職〕舟山隆一〔表具職〕唯野浩史〔美容師〕白鳥ふみ子、佐藤孝子〔ボイラー整備士〕加藤健一〔理容師〕鈴木千代子、伊藤正文、佐藤信幸〔フローリスト技能士〕佐藤逸郎〔鉄筋工〕大森賢三〔解体工〕古江政美髙橋秀樹、鎌田進

3・11震災文庫を読む 37

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本をご紹介します。

あの日の星空が震災を語る

仙台市天文台　企画・交流　高橋　博子

「わたしの句読点　女の文箱（ふばこ）」

河北新報社編集局／編
河北新報出版センター　刊

地震の後、雪が降りやむと現れたのは、見たこともないような満天の星。あの日の星空は、深い哀（かな）しみとともに多くの人々の心に刻まれました。

「わたしの句読点　女の文箱」には、河北新報の「ティータイム」に寄せられた震災後2年間の投稿が収められています。星の輝きに涙したこと、迷わず天国に行けるよう導く明かりのように見えたことなど、満天の星を目にした瞬間のさまざまな思いも綴（つづ）られています。率直な気持ちで語られる言葉は胸を打ちます。あの頃の自分や周りの状況を振り返りながら投稿者とともに悲しんだり喜んだり、いつしか何気ない日常の大切さにも気付かされます。

「星降る震災の夜に」では、

「星降る震災の夜に　ある精神科医の震災日誌と断想」

岡崎伸郎／著
批評社　刊

震災前後の医療現場の様子が、日記という形でリアルに描かれていきます。著者で精神科医の岡崎さんは、あの日仰ぎ見た満天の星が思索の原点になったと言います。「有史以来の大半を、人はこの星空と共に生きてきて、最後のたった数十年でそれを失ったに違いない」。この言葉は、自然と文明との間で、私たちはどう生きていくのかを考えさせられます。患者さんと岡崎さんとの対話の場面には、ついもらい泣き。大きな災害が起きた時の精神医療がいかに重要か、そして継続していくことの必要性も知ることができました。

これら2冊の本は、あの日の星空を震災の記憶の一つとして伝えていこうという天文台の活動にもつながっています。

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます　問市民図書館☎261・1585